

さようなら
こころは
竜の人生
15

GOOD BYE,
DRAGON LIFE.

永島ひろあき
HIROAKI NAGASHIMA

目次

第一章	小姑	7
第二章	清算	53
第三章	大邪神、死す！	108
第四章	愛ゆえに	152
第五章	邪神の呼び声	201
第六章	新たな日々	252

主な 登場人物

MAIN CHARACTERS

カラヴィス

破壊と忘却を司る大邪神。
その暴虐ぶりには
魔界の神々すら
恐怖する。

クリスティーナ

人間離れした身体能力と
剣技を併せ持った
絶世の美人剣士。
“竜殺しの因子”を
受け継ぐ。

ドラミナ

ドランと婚約し、
学園に同行する為に
使い魔になった
元バンパイアクイーン。

ディアドラ

妖艶な黒薔薇の精。
ガロア魔法学院で
指導員を務める。

セリナ

使い魔としてドランに
同行するラミアの美少女。
ドランと婚約を
果たした。

レニーア

神造魔獣の魂を持つ少女。
ドランを魂の父、
カラヴィスを
魂の母と慕う。

ドラン

最強の古神竜“ドラゴン”の
転生した姿。
ガロア魔法学院に通いながら
故郷ベルン村の発展に
取り組む。

第一章——小姑

陽が落ちてすっかり暗くなったガロア魔法学院の正門前に、伝説の古神竜——ドラゴンの転生者であるドラんと、その恋人である黒薔薇の精ディアドラの帰りを甲斐甲斐しく待っている二人の女性の姿があった。

半人半蛇の美少女セリナと、美しい赤いドレスに身を包んだバンパイアクイーンのドラミナ。彼女達もドランの恋人である。

先日、ドランはこの二人に日頃の感謝を込めて贈り物をしたのだが、ディアドラには魔法学院の講師という立場があり、その例から漏れてしまった。

そんなディアドラの為に、ドランは彼女と二人きりでガロアから遠く離れた場所へと出かけていたところだ。

二人で出かけたのだから、帰ってくる時も二人のはずである。

しかしどういうわけか、ドラン達の隣には、雪色の髪と褐色の肌を持った見慣れない少女がいる

ではないか。

「はじめまして、セリナ、ドラミナ。私はリネット。マスター・ドランの従属下にある、リビングゴーレムです」

「え？ ええ、ええー」

「あら、これは流石に予想外ですね。ディアドラさんと二人きりの逢瀬のお土産が、こんなに可愛らしい少女とは」

リネットと名乗った少女の自己紹介を聞き、事情を知らぬセリナとドラミナは、大きな衝撃を受けた。

しかし同時に、ドランが如何に非常識な存在であるかを日頃から否応なく理解させられていた二人は、まあドランさんだし、出かけた先でまた何かあって、それを力づくで解決してきた結果だろうと、すぐさま精神を立て直す。

「ええっと、リネットちゃんですね。私はセリナといいます。ドランさんの使い魔で、この通りのラミアです」

「私はドラミナ。セリナさんと同じくドランの使い魔をしています。種族はバンパイアです」

「はい、道中お話を伺いました。お二人とも、魔法学院在学の間だけ使い魔としての契約を結んでいらつしやって、マスター・ドランの恋人でいらつしやる事も存じております」

「いやあ、そんなあ、ドランさんの恋人だなんて、その通りですけど……」

リネットの率直な物言いを受け、セリナは大蛇の下半身をくねらせて照れはじめた。

セリナはとても分かりやすい人だとリネットの第一印象に刻まれたのは、果たして良かったのか悪かったのか。

ドラミナは、くねくねと揺れているセリナを微笑ましそうに見ながら声をかけた。

「さあ、セリナさん、嬉しいのは私も同じですが、そろそろ門限です。門番の方々のお仕事の邪魔としては申し訳ありませんし、一度ここから離れましょう」

「はわ、は、はい。すみません、恋人と言われてつい……。あんまり嬉しかったものですから」

セリナはそう言って、今度は羞恥に悶える。それを見たリネットは、分かりやすいという印象をますます深めたのだった。

連れ立って魔法学院の敷地に入った一行は、ドランが自作し、何度も増改築した浴場に併設されているテラスへと足を運んだ。

冬も間近となり、陽が落ちるのも早くなっていたが、浴場のテラス席には光晶石を使ったランプが幾つも設置されていて、暗闇を遠くへと追いやっている。

浴場の入り口では、この施設の管理をドランから委託されているテルマエゴーレム達が綺麗に整列しており、手を振って歓迎の意を示していた。

「彼らはマスター・ドランのゴーレム達ですか？」

素材は大きく違うとはいえ、テルマエゴレム達とリネットは一応同じゴレムという分類だ。彼女がテルマエゴレム達を気にかけるのも、当然と言えよう。

「ああ。この浴場の管理を任せているゴレム達だよ。どうも浴場の仕事に誇りを抱いているらしくてな。時々、私に反発する事もあるほどだ」

ドランは頷きながら苦笑する。

「それは、ゴレムが自身の中で優先順位を定めているという事ですか？ 浴場の管理の為に造り出されたとはいえ、創造主の意思に反するなど……通常、ゴレムにはあり得ない話です」

「ある程度の自由意思を持たせてあるからな。彼らがこれまでに蓄積した経験を学習して、個体ごとの個性も出てきているくらいだよ」

「そうですか、やはりマスター・ドランは非凡なお方であるようです。彼らはリネットにとっては先輩ゴレムです。彼らに恥ずかしいところを見られないように、精一杯、お仕えます」

「お仕えます、か。私は傳えられるのは苦手なのだが、考慮してはくれないかな？」

「そこは主人としての甲斐性を見せていただきたく思います」

案外物怖じせず言う子だなあ、とドランはリネットに対する感想を心中で零す。

今日は学友であるネルネシアやクリスティーナは浴場を使っていないようで、ドラン達がテラスを独占出来た。

テラスは近くにある男子寮の中からは見えない位置にある為、リネットとディアドラを交えた密

談を、他者に見聞きされる心配はまずない。

もつとも、どれほど隠密に長けた者であっても、ドラミナやドランの知覚網を掻い潜るのはまず不可能だから、無用な心配だった。

テラスに置かれているテーブルや椅子は、テルマエゴレム達の手入れが行き届いており、新品同然の輝きを放っている。

全員が着席すると、テルマエゴレム達が絶妙な間で淹れたての季節のフルーツティーを配膳していく。

ドランはテルマエゴレム達を製造する際に、お茶の淹れ方など覚えさせていなかったが、そこは手加減の仕方を根本的に間違えるドランの謹製のテルマエゴレム達である。主の知らぬところでありとあらゆる雑事を学習しており、個体ごとの性能差や個性に加え、こういった技能までも習得するに至っていた。

「さて、ではセリナとドラミナには、私とディアドラが出かけた先でどういった事態に遭遇したか、詳しく説明しよう」

ドランはそう前置きしてから、こうなった経緯を話しはじめた。

ディアドラと二人でアークレスト王国東部の都市サンザニアに赴いた事。

そこで学院のエドワルド教授と助手のエリザに再会し、彼に誘われてサンザニア近郊で発掘された天人の遺跡の見物に行った事。

そして、遺跡を悪用していた魔法使い——ブリュードを倒し、リネットを預かるに至った事。

リネットは、宮廷でも屈指のゴーレムクリエイターであったイシエルの遺作で、本来は彼の娘、リエルを蘇らせる目的で造られた、生きたゴーレムである。

しかし、リエルの魂は既に転生を果たしており、別の人格が宿り、リネットになったのだ。

イシエルの最高傑作と言えるリネットを預かった事で、ドランは十中八九、他の魔法使い達から注目されるだろう。

その上、ドランとディアドラが二人で行動していた事実も知られ、曲がりなりにも教師と生徒という関係上、問題視されるかもしれない可能性も、彼は包み隠さず口にした。

一連の話を聞き終えたセリナは、しみじみと感想を呟く。

「今後はもう、ドランさんの行くところには、必ず何かが起きると考えておくべきでしょうね。いえ、前から『そういうもの』だって、覚悟はしていましたけれど……。それにしても、また天人さんですか。前は上空の上に浮かんでいる都市で、今度は地下の研究所。あの人達は場所を選びませんね」

「天人の活動は地上も空も問わずに行われていたからな。彼らが滅んでも、その技術や産物は、全てが朽ちたわけではない。どこかしらで目にする機会は巡って来るわけだ」

「それにしたって、私達の遭遇率はずいぶん高い気がしますよ。教授さんみたいな研究者には、羨ましがられるかもですね」

セリナが例に挙げたスラニアの天空都市と今回の地下研究施設以外にも、かつて戦った魔導結社の総帥バストレルも天人関係に該当するし、ドランが三竜帝三龍皇と会談した月の水晶宮も、元は天人の施設だ。

ドラン達が一般の人々と比べて、まだ機能を停止していない天人の遺産と極めて高い頻度で遭遇しているのは間違いない。

言外に、これからもまた天人関係と遭遇しそうだ、と嘆くセリナの言葉を耳にして、ドラミナが同意を示す。

「天と地の次は海かもしれませんね。それか、空のもっと高いところ、そう、たとえば月や、星の海も可能性がないとは言いませんよ」

「海は、龍吉さんが綺麗に掃除してくれているといいですけど……」

セリナは溜息と共に、海の守護者の一人である水龍皇の名を口にした。

彼女としては、天人と関わりと必ず発生する物騒な事など、一切望んではおらず、ドランやドラミナ、ディアドラと一緒に穏やかに暮らせればそれでもいいと思っている。

「月も心配する必要はないよ。あそこには兎人と知恵ある蟹達が住んでいて、天人の遺跡の管理をしているし、数は少ないが、非常時に備えて高位の竜種も移住している」

平然と応えるドランを見て、リネットは自分の主がやはり尋常ならざる奇縁の持ち主であると再認識した。

「お話を伺う限り、リネットがマスター・ドランのゴーレムになったのは、それほど不思議な事ではないような気がします。何しろ、それ以上により得ない出来事を、七カ月ほどの短期間で経験しておられます。皆様方ならば、リネットが加わる程度は、日常茶飯事……大地母神マイラールや大邪神アル・ラ・カラヴィスの降臨と比べれば、些事である」とリネットには感じられます」
改めて指摘され、ドランは、今年の春の時点ではそこまでなかったのだが、と、苦笑を零す。

実際彼は、春先にセリナと出会うまで、辺境に住む農民の範疇に収まる生活を送っていたのだ。「まあ、否定は出来ないな。伴侶探しに故郷を出たラミアと出会う話は他にもあるだろうが、エンテの森でも有数の花の精であるディアドラと、この星におけるバンパイア始祖六家の正統な後継者であるドラミナとの出会いとなると、他に例はあるまい」

今後もしリネットを預かり続ける以上、ドランは彼女に自分達の素性をはっきり伝えていた。

この惑星において、最古にして最強のバンパイアの血統であるロイヤルバンパイアが使い魔になるなど前代未聞の出来事なのだが、ドランの魂が伝説の古神竜ドラゴンであると教えられたリネットからすれば、大した問題ではない。

最強のバンパイアですら、古神竜の使い魔としてはとてもではないが力不足というのが、厳然たる事実なのだ。

「恐れながら、マスター・ドラン。リネットは、主人が古神竜ドラゴンの転生者である事の方が、

はるかに衝撃的な事実であると、正直に感想をお伝えします。この世界で信仰を集める神々と直に交流可能で、かつその存在の根源的な抹消すら容易なマスター・ドランは、存在そのものが世界と生命全ての命運を左右します」

リネットは冷静な顔つきのまま熱弁をふるい続ける。

「こう見えてリネットはとても驚いています。リネットも、グランドマスター・イシエルも、まさか古神竜ドラゴンの転生者と関わり合いになるなどと、万に一つも——いえ、億に一つの可能性も夢想した事はありません。ですがそう考えると、マスター・ドランの力を借りたディアドラが、レイラインと同化したブリュードを圧倒したのも納得出来ます。星一つの力を取り込んだ程度では、とてもではありませんが、古神竜には敵いません」

「驚いていると言う割には、これまでと変わらぬ無表情に見えるけれどな」

ドランは表情の変化に乏しいリネットの顔を見ながら首を捻った。

「表情があまり変わらないのは、リネットの特徴の一つと記憶してくださいだされば幸いです」

どことなくだが、ドランはリネットが自慢げな雰囲気を出しているのを感じられた。

顔にこそ出ないが、雰囲気や仕草の方には心情が表れやすいらしい。

「ふむ、分かった。これから長い付き合いになるのだから、きちんと憶えておこう」

「ありがとうございます」

そう言って、優雅に一礼して見せるリネットの姿は、生前リエルが受けた教育によるものか、は

たまたイシエルが記憶させたものか、実に様になつていた。

「とはいえ、私達の事情を素直に受け取ってもらえたのは、ありがたい話だったよ。私達が魔法学院に在籍するのは来年の卒業式までで、その後は私の故郷であるベルン村に帰って暮らす予定だ。リネットにはそれに付き合ってもらう形になるが、嫌ではないだろうか？」

「ご心配には及びません。リネットは既にマスター・ドランの所有するゴーレムとして登録していただけるように、エドワルド教授に手配していただいておりますし、この身が朽ちるまでマスター・ドランのお役に立つ事が現在のリネットの最優先事項です」

「そうか、そこまで言ってもらえるのはありがたいがあるが、出来ればリネットには自分のやりた

い事を他にも見つけてほしいな。そう大仰に考えずとも、趣味や嗜好の類でもいい」
幼い子供を諭すみたいに声をかけるドランに、リネットは何を言っているのかよく分からないと細い首を傾げたが、ゴーレムとして主人からの願いや意に沿うように行動するのが、当然と思つて

いるのだろう。
「マスター・ドランのご意向に沿えるよう、リネットの全機能と性能の限りを尽くして善処いたします」

「私に無条件に従おうとするところは、レニアアを思わせるな。それ以外はまったく似ても似つかないのに」

「マスター・ドランの因子を用いて、かの大邪神が生み出した神造魔獣の転生者である、レニアア

お嬢様ですか」

リネットの口から出た、お嬢様呼びに、今度はこの場にいる全員が首を傾げた。まさか彼女がレニアアの事をそう呼ぶとは、誰も想像していなかったのである。

リネットは自分の発言が周囲に妙な反応を引き起こしていると察して目を瞬かせた。

感情表現に乏しいゴーレムではあるが、周囲の空気や雰囲気を読む能力はきちんと備わっている。「マスター・ドランはレニアアお嬢様を、ご自身の娘であると認識されているとお伺いしておりますが、不適切な呼称でしたでしょうか？ 人間の肉体との血縁関係はないとしても、靈魂で考えれば親子関係と称するに充分な条件を満たしていると、リネットも判断いたしました。もちろん、事情を把握されている方以外の前では、お嬢様とお呼びする事はございません」

確かに、ドラン自身が既に我が愛娘と認めているレニアアに対し、リネットが主人の娘として敬意を払い、お嬢様と呼んだとしても不自然ではない。

おかしい点があるとすれば、レニアアがお嬢様と呼ばれるにはあまりにもアレなところであつた。

皆の頭に引っかけた違和感は、あのレニアアが？——まさにこれである。

無論、レニアアはれっきとした男爵家の令嬢であり、家に戻ればお嬢様、レニアア様と呼ばれている。

だが、やはりレニアアの性格や振る舞いは、世間一般におけるお嬢様という言葉から受ける印象

とは、あまりにも合致しない。

彼女には破壊魔とか、殺戮者とか、嗜虐女帝とか——そういった恐ろしい呼び名の方こそが似合う。

「そうだな、確かにレニアがそう呼ばれるのは不思議ではなかったな。さて、今日はもう遅いから後日になるが、リネットにはレニアにも会ってもらわなければならん。それに、クリスティーナさんやネル、ファティマ、フェニアさんといった、私の学友達にも紹介する必要がある。あとはオリヴィエ学院長にも。ふふ、また学院長に呆れられてしまうかもしれないな」

時刻が時刻だけに、リネットとレニアの顔合わせは翌日以降にするのが妥当である。

しかし、実際にレニアがリネットと対面したならば、いったいどんな反応を見せるのか。セリナはそんな不安を払うように小さく首を振る。

ドランが居る以上は、レニアが激情のままに力を揮う事態にはなるまいが……

「んー、でもレニアさんはドランさんの娘さんだって認める発言をすれば、もの凄く簡単に機嫌が良くなりますから、今みたいにリネットちゃんがレニアさんを、お嬢様って呼べば、きっと大丈夫だと思いますよ」

「セリナの言う通りだな。あの子は他者から自分が私の娘だと認められたがっている。承認欲求というものだろうか。その線で攻めれば、小姑じみた言葉を口うるさく言いはしないだろう」

レニアが小姑という見方はセリナやドラミナ、ディアドラにとっても共通認識である。

しかし、彼女らは既にレニアから、お父様に心酔し、愛を捧げる殊勝な者達と認められているお蔭もあって、やいのやいのと重箱の隅を突くような小言は言われていない。

代わりにレニアが求めるのは、ドランに対する絶対的な心酔と、絶え間ない自分磨きで、これはこれで厳しいものではある。

「レニアお嬢様との接し方には細心の注意を払います。それにしても、リネットはとてつもない主人を持ったものです。従者として相応しい働きが出来るように、常に自身の向上を心掛けなければなりません！ これこそ、仕え甲斐のある主人を見つけた従者の気持ちに他ならないでしょう」

確かに、これほど規格外の存在に囲まれた従者など、他には居るまい。

リネット自身もおそらく世界で唯一のリビングゴーレムであるし、天人由来の永久機関を心臓部に持つなど、極めて希少かつ強力な存在ではあるが、いくらなんでも、レニアやドラミナ達と比べては相手が悪すぎる。

「リネット、それほど気を張る必要はないさ。ベルン村に戻ってからはともかく、今はまだ大した仕事もない。私達との生活に慣れるのを第一に考えてくれればいいよ」

「マスター・ドランは寛大なお方です。しかしそれに甘えては、リネットは墮落してしまいます」

「君は本当に生真面目な性格をしているね。私もまだまだリネットとの付き合いを始めたばかりだ。これからお互いを理解していこう。さ、大体のところは話し終えただろうから、今日はもうそれぞれの部屋に戻って、明日に備えて休もう」

魔法学院の敷地内は光精石などの明かりがあるから真つ暗闇というわけではないが、気温も下がってきている。

ディアドラは低温に耐性を有しているものの、一般的な花の精の性質として寒さには敏感であるから、部屋に戻るのには賛成のようだった。

「私は男子寮まで足を運ぶわけにはいかないし、ここでお別れするわ。リネット、貴方はドランのところについて行きなさい。明日、また一緒にオリヴィエのところに顔を出して、事情を話さないといけないから、その時に会いましょう。それじゃ、おやすみ、ドラン、セリナ、ドラミナ、それにリネット」

ディアドラは立ち上がり、軽く手を振ってから教師用の部屋へと戻っていく。

リネットも立ち上がって彼女を見送り、小さく頭を下げる。

「はい、ディアドラ、今日は色々と、本当にありがとうございました。あの、また、明日」

「ええ、また明日ね」

ディアドラが足を止めてリネットを振り返り、柔らかに笑う。

何故か自分に対して懐いてくるリネットの事を、少なからず可愛く思っているに違いないと分かる笑みだった。

ディアドラが席を立ったのを機に、ドラン達も後片付けをテルマエゴーレム達に任せて男子寮へ

と戻った。

元は大きな物置部屋だったドランの部屋は、リネット一人分の寝台を新たに用意しても十分な広さがある為、急な住人の追加にも対応出来た。

ドラン達の部屋に入ってすぐ左手に簡易の錬金陣や鍋、竈の他に硝子瓶などを収めた棚が置かれていて、左奥にはドランとセリナが共用している寝台と、本棚や勉強机がある。そして、衣装箆^すを挟んだ右奥にドラミナの棺桶^{かおけ}がでんと置かれているといった状況だ。

部屋の中央に置いてあるテーブルに、運び込んだお土産を載せてから、ドランは足元の影に右腕を突っ込む。

彼はそこからサンザニアで予め購入しておいたリネット用の寝台と衣装箆^{あわじ}を取り出して、まだ空いている場所に設置した。

「リネットにはこれを使ってもらおう。君の肉体を維持していくのに、何か特別な装置は必要なのかね？」

「いえ、リネットの心臓が動いている間は、肉体を構成する無機物有機物のどちらも自動で補修出来ますので、不具合が生じない限りは問題ありません。また、不具合が生じた際には、事前にお渡しした取扱説明書をご参照いただければ、対応が出来るはずです。ただ、マスター・ドランでしたら、リネットの肉体を不具合が起きる前にまで時間を巻き戻したり、不具合が生じなかった事出来たりするのではと思います……」

「まあ、出来なくはないね」

「やはり、マスター・ドランは規格外のお方です。神々が力を失わずにこの地上に降臨したのも当然——いえ、伝承通りならば、それ以上のお方なのですから、当然なのでしょう。マスター・ドランに相応しいゴーレムであるのはなかなか難しそうです」

目を回してしまいそうなリネットに、先輩であるセリナが励ましはげの言葉をかける。

「リネットちゃん、大丈夫だよ。私達もドランさんに相応しい女性であろうと日夜努力しているから、一緒に頑張ろう？」

「ありがとうございます、セリナ。セリナとドラミナは将来マスター・ドランの伴侶となる方。お二人にとっても恥ずかしくないゴーレムであるように、リネットは精進しやうじんします」

「うーん、ドランさんの伴侶と言ってもらえるのは嬉しいけれど、そこまで深く考えなくていいのに」

「リネットはゴーレムですから」

リネットの中では自分がゴーレムであるという事が、譲れぬ一線として明確に存在しており、彼女はあくまで従者、仕える者としての立場を貫く姿勢であるようだ。

彼女はリエルの記憶や知識を与えられた影響で、落ち着き払った人格を有しているものの、実際にはまだ一歳にも満たない生まれだての赤ん坊も同然だ。

だからこそ、既存の知識に拘こるし、発想や考え方そのものの種類がどうしても乏しく、視野も

狭い。

そのせいもあって、意固地いこじとも頑固がんことも取れる態度を取る傾向にあるようだった。

それをドラン達が明確に理解するのは今少し先の話ではあるが、直感力が並外れているこの面々めんめんは、既にある程度リネットの性格を把握していた。

リネット自身がゴーレムであるという素性に拘こるのなら、それを無理に変えさせる必要はないだろう。

むしろ、彼女が自分はゴーレムだからと一歩引く事なく、我がを出すようになるまでゆつくりと付き合っていけばよいのだ。

ドラン達は特に言葉を交わさずとも揃そろってそう結論付けて、話題をテーブルの上に置いた紙袋や箱へと向けた。

サンザニアで仕入れてきた東国の絹や品質の良い布地の東に、ガロアでは輸送費の問題などから高価になっている装飾品や希少な嗜好品の類だ。

純粹なお土産であると同時に、アーケレスト王国東部の交易の要であるサンザニアでは、どのような品が取引されるか、二人に伝える意味もあって、ドランはこれらの品を手広く購入してきた。

セリナとドラミナは王国内の魔法学院の頂点を決める一大祭典——競魔祭きやうまさいで見た王侯貴族の衣服や装飾品を思い出しながら、そういった上流階級の人々が求めるような品々を手にとって眺ながめる。

「アラクネさんの糸とはまた違った手触りの良さですね。轟国こうこくや高羅斗こうらとだと絹が特産品の一つなん

でしたっけ」

セリナは生地なまの滑らかな感触に思わず溜息を漏らした。

「翡翠や玉、水晶などの鉱物も特産品でしたね。それらの細工物も同様ですか。東の戦争が始まれば、こういった品々の流通は少なくなるでしょう。お金の流れに聡い方々は、今から買い占めたり、独自に流通経路を確保したりするか、あるいは国内で需要と流通を賄えるものに流行を変えようと動いているでしょうね。轟国などからの輸入品の代替となる物をガロアで用意出来れば、自然とお金が集まってくるはずですけど、多少出遅れてしまうのは仕方ありませんね」

かつては大国の女王であったドラミナには、口にした内容以上のものが見えているだろうが、あまりドランのやる事に口出しするつもりはないようで、胸に秘めた考えのうち、ほんの僅かを伝えるに留めていた。

「ふむ、絹や鉱物の類はガロア近郊で賄うのは難しいな。鉱山を探すとなれば、モレス山脈に活路を見出したいが、道中の危険性を考えると、そう安易には決められない。それに、ベルン村の領主となるのはクリスティーナさんだ。彼女を抜いて具体的な話を進めてしまつては、拗ねられてしまいそうだな」

「ふふ、確かにドランの言う通りかもしれませんね。クリスティーナさんはどこかそういう子供っぽいところがありますから。あら、これは？」

ドラミナは、自分達に対しては普段隠しがちな素すを見せるクリスティーナの事を思い、小さ

な笑みを零した。

そのままテーブルの上に広げられたお土産を眺めていたドラミナの視線が、ふとある品に吸い寄せられる。

「ん、ああ、それが気になったのか？ 造り物だが、幸運のお守りらしい。尻尾の方もあるよ。物と人間が集まる都市だったから、様々な地方の昔話やおとぎ話に由来する品が多くてね、このお守りもそのうちの一つだな」

ドランが親切心から解説を始めるが、ドラミナの耳にはほとんど届いてはいなかった。

それは、ドラミナが抱えているとある悩みを解決する可能性を秘めたものだった。目にした瞬間、これだ！ と閃き、彼女の脳裏に稲妻が走ったのである。

ドランがディアドラと二人でお出かけする前、ドラミナの心中を深い懊悩おうのうの闇に包みこんだ問題とは――

ある日の夜、ドラミナは葛藤かつとうしていた。

二つの選択肢のどちらかを選ぶ事が出来ずに、ひたすら悩み続けていた。

ヴァルキュリオス王国の王座に就いていた時、どれほど重大で解決の難しい問題であろうと、短い時間で最善と思える判断を下してきた決断力は、名剣のような切れ味を失い、錆びついた鉄屑同然になり下がってしまったている。

はたしてここまで悩むのはいつ以来だろうか。

幼い頃、世話役に園遊会へ出席する時の召し物として二着のドレスのどちらかを選べと言われた時だろうか。

その世話役もドレスも、既に灰と変わって跡形もなくなってしまったが、今も色褪せない思い出となってドラミナの心に残っている。

「にゃあん」

自分の世界に没入するドラミナの耳を、猫の鳴き声が揺さぶった。

大好きなご主人に甘える、蕩けた鳴き声である。よくもここまで……と、思わず感心してしまうほどの甘ったるい声だ。

ドラミナは、鳴き声を発する「猫」へと瞳を向ける。ベッドの上でドラランに寄り掛かり、顎の下や咽喉を撫でられている「セリナ」へと。

「にゃーん」

「よしよし」

甘えてくる分にはとことん甘やかす性分のドラランは、ごろにゃんと体をすり寄せてくるセリナを、望まれるがままに可愛がっていた。

「にゃ、にゃ、にゃ」

セリナは次々ともたらされる喜びにほとんど理性を失っている様子で、短い声を連続して繰り返す。

出す。

そんなセリナの姿を目の当たりにして、ドラミナは「なんて羨ましい」と思わずにはいられなかった。

ああ、いいな、いいな、ととても羨ましいな——と思うドラミナだが、実は彼女も、猫の真似をして甘える事自体には、これといって躊躇はない。

では何を悩んでいるのか？

それは……猫になるべきか、それとも犬になるべきか、という問題だった。

いつだったか、部屋でドラランに甘えるセリナが、にゃーんと言いながら抱きつく姿を初めて見た時は、まあ大胆な、と驚いたものだが、ドラランがおおらかにそれを受け止める様を見ていれば、羨ましくもなる。

セリナがにゃんと鳴けば、ドラランは猫にするように咽喉の下を撫で、わんと鳴けば、頭を撫でたり頬をむにむにしたり……とにかく、そんな二人を見ているうちに、ドラミナの心中で私も！ という気持ちが大噴火するのは至極当然の理である。

セリナはその日の気分によって「セリにゃ」になったり、「セリわん」になったりと、思う存分ドラランに甘えている。

実の妹のように愛しているラムアが、犬猫両用型ラムアであったと知り、ドラミナは密かに戦慄したのであった。

ドラミナとて、犬や猫の真似事をするのに恐れなどはない。

しかし、今日は猫になってドラランに可愛がってもらおうか、犬になってドラランに可愛がってもらおうか、選ばねばならないとなると、途端に悩んでしまうのだ。

いっそ両方やってしまえばいい、と強欲な解決方法が幾度となく脳裏をよぎったが、先駆者であるセリナは犬の時は犬だけ、猫の時は猫だけと、きちんと決めてドラランに甘えている。

この事からドラミナは、甘える時はどちらかだけにしなくてはならないと捉えていた。

実際にはそんな決まりはないのだが、それを訂正する者が誰もいない為、ドラミナは今日まで犬と猫の狭間でもがき苦しんでいるのだった。

にゃんか、わんか。

にゃん、わん。

にゃん！ わん！

セリナは〃セリにヤ〃を選んだ。そしてにゃんにゃん鳴きながら、ドラランに目一杯可愛がってもらっている。

ドラミナだつて可愛がってもらいたいのだ。

にゃんにゃんして、にゃんにゃんされたい！

わんわんして、わんわんされたい！

——ドラミにゃか、それともドラミわんか。ああ！ なんて悩ましい……そして贅沢な悩みであ

る事か！！

ドラミナは身悶えしながらも、ついに決断を下した。

「ドララン、わ、私も可愛がってほしい……」

〃にヤ〃と続けたのか、それとも〃わん〃と続けたのか。それはドラランとドラミナとセリナしか知らない秘密である。

他者からすれば果てしなくどうでもいい事ではあるが……セリナが二つの属性を使いこなす恐るべき精神の持ち主であると知って以来、ドラミナは活路を開くべく自分にも新たな〃何か〃を求めていた。

そして今、彼女に天啓が下りてきたのだ。

彼女自身、まさかこうも早く問題を解決出来るとは、思ってもいなかった。

ドラミナは、ドラランが買ってきたお土産の〃幸運のお守り〃をじっと見つめてから、おもむろに手に取る。

それを見ていたリネットが、不思議そうにセリナに問いかけた。

「セリナ、ドラミナはどうしてじっとアレを見ているのでしょうか。それほどまでに気に入ったのでしょうか？ これまでの会話から察するに、ドラミナの嗜好としては意外と感じられます」

「んー、あ、ああー、最近ちょっとドラミナさんが何か気にしているみたいでしたから、そのせ

いかも……。ドラミナさんは普段真面目な分、思い詰めやすいというか……。こう、思わぬところでダダッと走りはじめてしまうところがあるというか」

セリナの脳裏には、かつてドラミナが自分の事を無職、金食い虫と卑下した時の光景が思い返されていた。

周りがなんとも思っていないなくても、自分がそうと感じたら思い詰める悪い癖が、ドラミナにはあった。

今もその悪癖のせいで、周りに目が行かずにじっとお土産のソレを見つめ続けている。

そしてドラミナは固い決意と覚悟と共に、ソレを頭の上に載せた。

「わん」も「にゃん」も使いこなす犬猫両用型ラミアであるセリナを相手に、同じ犬と猫の土俵で勝負しても、どうしても二番煎じになってしまう。少なくともドラミナはそう思い込んでいた。

だから、ドラミナは「わん」でも「にゃん」でもない、第三の道を求めている。まさにそれが、ドラミナ達からのお土産にあった。

ドラミナの紫がかった銀の髪の上で、それは小さく揺れていた。

彼女が頭に載せたものはカチューシャの一種であったが、そこから細長い物体が二本伸びている。外側は白いもこもことした毛皮に包まれ、内側はピンク色……。見間違いない、兎の耳であつた。

頭の上で兎の耳を揺らすドラミナは、ドラミナに少しだけ不安そうにこう言った。

「ドラミナ……」

「うん？」

「ど、ドラミナだぴよん」

「ふふ、なるほど、ぴよんか。兎というわけだね。普段の悠然としてしているドラミナとはまた違って、その耳をつけていると、とても愛らしく見えるな」

ドラミナの素直な褒め言葉を聞き、薄い不安の色に染まっていたドラミナの顔が、喜び一色に塗り替えられるが……

「まあ、出来ればセリナとリネットの見ていないところでしてほしかった——と思うのは、贅沢かもしれないが」

ドラミナにそう指摘され、ドラミナはこの場に自分と彼だけしか居ないわけではないのを、ようやく思い出したらしい。さあっと音が聞こえそうな勢いで、彼女の顔から血の気が引いていく。

ドラミナはそっと振り返り、にこにこ笑みを浮かべているセリナとリネットを窺い見る。

「あ、あう、セリナさん、リネットさん、これ、これは……」

口をぱくぱくと動かしてなんとか誤魔化そうとするドラミナに、セリナは両手を頭の上に載せて兎の耳を真似しながらこう言った。

「ぴよん」

セリナを真似てリネットも同じように両手で兎の耳を形作り、頭の上でぴよぴよと動かした

立ち読みサンプル はここまで

がら、無表情のまま無慈悲に告げた。

「ぴょん」

「~~~~~」

羞恥から顔を真っ赤に染めたドラミナの、声にならない悲鳴が部屋の中で木霊したのだった。

ドラミナの兎騒動が落ち着いてから、ドラン達はようやく明日に備えて眠る準備に入った。

バンパイアであるドラミナにとっては、夜も深まるこれからこそが活動に適した時間だが、今日ばかりは精神的な衝撃が強く、棺の中に引き籠もって一夜を明かすつもりらしい。

ドラミナが兎の耳を頭の上で揺らしたまま棺の中に足を踏み入れ、セリナが寝巻に着替えてドランと同じ寝台に潜り込む様子を、リネットはサンザニアで買い与えられたベッドの中でじっと観察していた。

その視線を感じたドランとセリナ、それに棺の蓋を閉めようとしていたドラミナ達が、リネットに目を向ける。

寝台で横になり、口元まで毛布を引き寄せていたリネットは、ドラン達に注目されているのに気付くと、両手で顔を隠してしまった。

「どうした、リネット。枕が変わると眠れないのかな？」

ドランは、やはり何か特別な装置が必要だったのだろうか？ と疑問を抱きながら、リネットに

